令和４年度「臨床心理学研修講座」　　研修の様子

第４回　８月３日(水)

今回のテーマは，「なぜ，ほめてもうまくいかないのか…」でした。

ほめに対するよくある批判…

〇子どもをほめろっていうけれど，本当にそれで良くなるの？

〇ほめているのに，全然良くなりませんよ。

今回の研修では，「①褒めても効果がない時の対応について考える。②心理学的な根拠に基づいてポイントを抑えて褒められるようになる。」ことを学びました。

褒めるポイントがずれている。しかし，褒めには効果がある。効果を引き出すには…

→褒める的を作る。的を絞る。

【事例１】

椅子に座って授業を受けている時間が短いＡ君。授業中に歩き回ったり，隣の子に話しかけてしまったりして授業妨害。座っていると思いきや居眠り。先生は「Ａ君，～して」などと細かく声をかけるが，なかなか指示が通らない。ほめる指導が良いというので，時々，課題ができた時には，「偉いね」と伝えている。しかし，またすぐに集中が続かず，歩いたりおしゃべりをしたりしてしまう。多動だし，発達障害なのではないかと考え，保護者との相談も検討中である。

→さあ，この事例にどう対処していきますか？

〇効果が薄い褒め

形容詞褒め…真面目にやってるね。元気になったね！ちゃんとしているね。　等

的が不明な褒め…単に，「凄いね」「頑張ったね」

否定な褒め…「～をしないで…」「～を我慢できて…」

〇ほめは万能ではない。

・子ども自身に改善の動機がない。

・子どもにとってハードルが高すぎる課題になっている。

・学齢が高い子に，大げさだったり，不適当だったりするほめ言葉

・褒めるポイントがずれている。

・褒めヶ大げさ

→「報酬」という捉え方が大事です。

受講者からの受講後の感想の一部を以下に紹介します。

〇　不登校の生徒や不登校予備群の生徒や対応が難しい生徒との関係づくりや心を開いてもらうためのスキルや考え方がよくわかりました。

〇　９月に実際に試してみようと思える内容でした。今までの教育現場で「あの時こうしておけば…」と考えられ，次回はこうしようと具体的に考えることができました。

〇　褒めの演習は何度かやっていますが，改めてポイントを絞った褒め方が大事だと実感しました。

〇　褒める際，ただ褒めるのではなく，的を絞って伝えてみるというのは実践してみようと思いました。